

復活節第六主日

2009.5.17

ヨハネ15.9-17

今日の福音のみことばは先週のヨハネ福音書の箇所が続くみことばです。先週の福音ではイエス様とその弟子たちの関係がぶどうの木のイメージで語られていました。そこでのメッセージは、イエス様と弟子たちの関係はぶどうの木とその枝のようにいのちの樹液によって結ばれており、枝である弟子たちは、幹であるイエス様につながっていてこそ、豊かな実を結ぶことが出来るということでした。

このぶどうの木のみことばをわたし一人に向けられた、個人的なものとしてだけ受け止めてしまうと、不安になることがあるかもしれません。こんな自分は本当にイエス様に結ばれていると言えるのだろうか。そんなふうに思ってしまうことが多いのではないのでしょうか。

ぶどうの木のイメージは旧約聖書の中にもあって、詩篇などでは神の民とされたイスラエルの民全体が一つの大きなぶどうの木のイメージで語られています。そのような旧約聖書の背景から考えると、幹であるイエス様とその幹につながった枝であるイエス様の弟子たち全体が一つの大きなぶどうの木として生き生きと生い茂っているのです。わたしたち一人ひとりも、洗礼の恵みを受けたことによって、幹であるイエス様からいのちの樹液を供給される、この大きなぶどうの木につながる枝の一部とされたのです。幹であるイエス様から生え出た枝は、二千年のときを経て、東の果ての国に生きる私たちのところまでそのつるを伸ばし、この国のこの時代に生きるイエス様に結ばれたわたしたちのもとにまでいのちの樹液を送り続けているのです。

* * *

今日の福音のみことばは、このぶどうの木全体に生気をみなぎらせ、豊かな実を結ばせる樹液が何であるかを明らかにしています。それは言うまでもなく愛であるとイエス様は言われます。そればかりではなく、愛は掟である。あなた方が互いに愛し合うこと、これがわたしの命令であるとイエス様は言われています。このみことばは私たちが萎縮させるかもしれません。愛することの難しさをいやというほど経験し、愛そうとして傷つき、愛し続けることに疲れきっている私たちがいるからです。しかし、私たちの現実がそうであればあるほど、私たちは愛を語るイエス様のみ言葉に耳を傾けなければならぬと思います。私たちは互いに傷つき、傷つけあいながらも、心の奥底において真の愛に飢えているからです。

「私があなただ方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい。」というイエス様のお言葉を自己嫌悪に陥ることなく、素直に受け止めるにはどうしたらよいのでしょうか。

イエス様の語られる愛は私たちの信仰がそうであるように、私たちの側から出発するものではなく、イエス様がいてくださることによって可能となるものです。このことには少し説明が必要かもしれません。

キリスト教の信仰は煎じ詰めれば、イエス・キリストというお方を信じる信仰です。私たちはキリスト教の教会と出会い、その教会において信じられてきたイエス・キリストというお方を知り、自分も教会の信仰の中心におられるイエス・キリストというお方を信じますと告白することによって、洗礼を受けカトリックの信者となりました。イエス・キリストはおよそ二千年前に十字架にかけられ死なれましたが、その十字架の苦しみの死は、わたしたちの全ての罪を赦すための、私たちへの究極の愛の姿であると受け止めることによって、私たちはイエス・キリストを私たちの救い主として信じる者となったのです。十字架上に死なれたイエス・キリストは、今も復活のいのちのうちにあって、私たちのあらゆる行きづまりを打ち破る力の源となり、私たちがどのような状況に陥っても、その中で私たちに力づける希望の源となって私たちとともに歩み続けてくださるお方です。このようなイエス・キリストというお方を信じるのが、キリスト教における信仰のあり方です。つまりイエス・キリストというお方は、私たちの信仰に先立って存在し、私たちの信仰を可能にしてくださる、信じる者たちの主であるお方なのです。イエス様の愛の教えは、このようなイエス・キリストというお方への信仰を前提として語られているのです。

* * *

今日の福音の中で、イエス様は「私はあなた方を友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなた方に知らせたからである。」とされています。イエス様は父なる神様からどのようなことをお聞きになられ、どのようなことを弟子たちに知らせてくださったのでしょうか。今日の福音の最初のお言葉に注目したいと思います。「父が私を愛したように、私もあなた方を愛してきた。」とイエス様は言っておられます。御父の独り子としてイエスさまが父なる神様の懐にあって聞いた言葉の全ては、「子よ、私はあなたを愛している」という言葉であったにちがひありません。今日の第二朗読のヨハネの手紙には、「愛するものは皆、神から生まれ、神を知っている。神は愛だからである。」とされていました。全てのものに先立って父なる神から生まれた、父の独り子であるイエス・キリスト様こそ、神は愛であるということを知ったお方であり、その愛のうちにとどまり続けるお方です。父なる神の愛を一身に受け、その愛をご自分のいのちと一体化されたイエス様はその愛をもってご自分の弟子たちを愛してくださるのです。その究極のお姿が、先ほども言ったように友のために命を投げ打つ、あの十字架のお姿です。あの十字架のお姿の中に、父なる神の愛と一体となったイエスさまの私たちへの愛がこの上ない形で示されているのです。

今日のヨハネの手紙の最後の部分をもう一度読んでみましょう。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛して、私たちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わ

しになりました。ここに愛があります。」この愛にとどまりなさい。今日もイエス様は私たちに
に向けてそう呼びかけてくださっているのです。

それにしても、愛を語るのにどうしてイエス様は掟とか命令というような言い方をなさ
るのでしょうか。ここでも、旧約の律法の書が背景となっています。旧約の律法におい
ては、イスラエルの主なる神の掟と命令とは同じ意味を表すことばです。神の掟は、イ
スラエルの民にとって神からの命令なのです。そしてその掟、命令はこれに従うこと
によってイスラエルの民の一人ひとりが神への忠実さを表す信仰の行為となり、そうす
ることによってイスラエルの民は神の祝福のうちに、いのちを永らえることが出来るのです。
イエス様がここで私の掟、私の命令という言い方をなさるのは、この旧約の掟を念頭に
置かれてのことです。

もう一度、ぶどうの木のイメージに戻って考えてみましょう。ぶどうの木にはぶどうの
木の成長の法則といったものがあります。それはぶどうの木の掟とも、ぶどうの木に与
えられた命令とも言うことができます。ぶどうの枝は幹につながっていなければなりません。
一本一本の枝の端々にまでいのちの樹液が行き渡らなければ、ぶどうの木は実を結
ぶことは出来ません。同じように、私たちにとって何よりも必要なことは、幹であるイエ
ス様に結ばれていることです。イエス様の愛に潤されて、干からびて枯れそうになっ
ている、私たちの愛の枝がみずみずしい生気を取り戻し、豊かな愛のいのちの実りを生活
の端々に結んでゆくことが出来ますように。今日も、このミサの中でイエス様の愛の結
晶であるご聖体とともに近づき、愛すること乏しい、しかし愛に飢えている私たちも、イ
エス様が御父の愛と一体となられているように、イエス様と御父なる神の愛に結ばれ、
一体とされることを願いたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高